

## ハワイ語における魚の成長段階名称について

その他（別言語等） のタイトル	Distinctive Fish Names for Stages of Growth in Hawaiian
著者	塩谷 亨
雑誌名	北海道言語文化研究
号	15
ページ	95-107
発行年	2017
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/00009521">http://hdl.handle.net/10258/00009521</a>

# ハワイ語における魚の成長段階名称について\*

塩谷 亨

## Distinctive Fish Names for Stages of Growth in Hawaiian

Toru SHIONOYA

**要旨**：ハワイ語における魚の成長段階名称について、その区分の仕方と名称の形成法について分析した。区分の仕方としては、2段階区分が最も多く段階数が増えて複雑になるほど例数が減ること、幼魚段階名称において他の段階よりも多様性を示すこと、同じ一つの名称が特定の魚の異なる成長段階を指す事例が存在すること、異なる魚種の間で幼魚名・中間段階名に異魚種間共通の名称が存在する事例があることが指摘された。また、成長段階名の形成法としては、他の成長段階と無関係の独立名称を用いる場合、成魚名の全体または一部の音節が重複されたものを用いて若い成長段階の名称を形成する場合、成魚名又は最終中間段階名（またはその部分）に別の要素が付加された複合的名称を用いる場合の三種類あることを指摘した。また、日本語諸方言についての先行研究で指摘された特徴及び北海道方言の事例との対照を行った結果、ハワイ語との間にある程度の普遍性が見出されることを示した。更に、成長段階名の中でも幼魚段階名には特別な側面があることを指摘した。

**キーワード**：ハワイ語 魚種名 出世魚 日本語諸方言 北海道方言

### 1. はじめに

ハワイ諸島は、日本と同様、四方を海に囲まれ陸地にも多くの河川が流れる地域であり、古くから漁業が盛んであった。従って、ハワイ諸島固有の言語であるハワイ語についても、日本語同様、漁業や魚種関連の語彙が非常に豊富である。日本語には、魚種関連語彙の豊かさ示す例として、「出世魚」と呼ばれる魚の成長段階に応じて名称が変わるシステムがある。実は、ハワイ語においても、日本語に匹敵する出世魚的な語彙システムが存在する。本稿では、このハワイ語の出世魚的システムの特徴について示し、それについて日本語及び北海道方言との対照を行い、魚の成長段階名システムに関する普遍性の一端を示すことを目的とする。尚、狭義の「出世魚」は成長段階により全く独立した名称を付与する場合（例：ハマチ<ブリ等）を指すが、本稿では、同じ語から派生した下位分類的名称が付与されている場合（例：シラスウナギ<ウナギ等）も含めるため、以後、「出世魚」ではなく「成長段階名」という名称を用いる。

第2章では、ハワイ語では魚の成長段階をどのように区分しているか、及び、成長段階名

はどのように形成されているか分析することを通して、ハワイ語における魚の成長段階名称システムの特徴を示す。第3章では、第2章で示したことについて、日本語及び北海道方言における魚の成長段階名称システムとの対照を行う。その際、第3.1節では、澁澤(1992)で指摘された日本語の諸方言における魚の成長段階名のいくつかの特徴についてハワイ語との対照を行い、第3.2節では、科研費による共同研究で調査を行った北海道方言における魚の成長段階名システムとハワイ語との類似点について論じる。

ハワイ語の魚種名のデータとしては、ハワイ語の魚種名を扱った最も詳細な文献である Titcomb and Pukui (1952)を主データとし、それを補うデータとして、Pukui and Elbert(1986)、Randall(2010)、Hoover(2008)を用いた。北海道方言の魚種名データとしては、尼丘他(2011)、木村(1997)、水島他(2003)、石垣(1991)を用いた。ハワイの魚種を識別するための指標としては、基本的に学名を用いたが、学名だけではどのような魚か全く想像できないため、便宜上、日本魚類学会(1981)に基づき、特定できる範囲で、その魚の標準和名を、それが特定できない場合には、その魚の属する科名、属名等を併記した。また、複合的な下位分類名称を列挙する場合、上位分類を表す要素が繰り返し表示されることがある。その場合には、繰り返し要素を初出ではそのまま省略せずに表示し、二回目以降は頭文字で(例: weke ‘ula / weke pueo を weke ‘ula / w. pueo のように)表示する。

## 2. ハワイ語における魚の成長段階名の区分の特徴

### 2.1. 成長段階名の区分の仕方

Titcomb and Pukui (1952)に見出し語として提示され学名まで特定されている魚種及び魚種グループの数は206であるが、そのうち、何らかの成長段階名が示されていたのが35例であった。以下、成長段階の区分数により4つの表に分けて提示するが、その際、後の参照の便宜のため各項目には表毎に通し番号を付与する。尚、今回のデータは複数の話者、複数の方言から取られていることもあり、それぞれの成長段階名称について、しばしば多数の、別名が提示されている場合がある。それぞれの段階名に別名がある場合には / で区切り列挙したが、方言差或いは個人差によって同じ名称なのに成長段階の順番が入れ替わってしまっている場合<sup>1)</sup>、及び、他の魚種と共通の成長段階名称が用いられている場合には、欄を分割し、別系統の段階名として表示した。尚、Polydactylus sexfilis (ツバメコノシロ科ナンヨウアゴナシ)については、方言により成長段階の区分数が異なったため、表2と表3に別々に示した。

幼魚段階と成魚段階の合計2段階からなるものは以下の21例である。

表1: 幼魚段階、成魚段階の合計2段階からなるもの

学名	幼魚	成魚
1.Strongylura indica (ダツ科の魚)	‘aha‘aha	‘aha
2.Thynnus tyynnus / Neothunnus	kananā	‘ahi

macropterus 等 (クロマグロ、キハダマグロ等のマグロ類の魚)		
3.Holocentrus ( イットウダイ科の魚 )	‘a‘ala‘ihi	‘ala‘ihi
4.Dascyllus trimaculatus( スズメダイ科ミツボシクロスズメダイ )	‘ā / ‘a‘ā	‘ālo‘ilo‘i
5.Priacanthus boops / P. cruentatus / P. maracanthus / P. hamrur ( キントキキダイ科の魚 )	‘alalauwā	‘āweoweo
6.Serranus quernus ( ハタ科マハタ属の魚 )	hāpu‘upu‘u / ‘āpu‘upu‘u	hāpu‘u
7.Thalassoma ballieui / T. duperry 等 ( ベラ科の魚 )	‘ōhua	hīnālea
8.Thalassoma purpureum(ベラ科キヌベラ)	‘ōlani/ ‘ōlali/ palae‘a / pākauelea / pākaiele / kanaloa / pā‘ou‘ou / pāhouhou / ‘āwela / ‘awala	hou
9.Naso lituratus / N. unicornus / N. brevirostris (ミヤコテングハギ、テングハギ、ツマリテングハギ等ニザダイ科テングハギ属の魚)	‘ōhua pākala / pākalaka / pākalakala	kala
10.Cheilio inermis ( ベラ科カスマベラ )	‘ōhua	kūpou / kūpoupou / kūnounou / poupou
11.Abudedefduf sordidus(スズメダイ科シマスズメダイ)	‘ao‘aonui	kupīpī
12.Parupeneus multifasciatus( ヒメジ科の魚 )	‘āhua / ‘ōhua	moano
13.Cypselurus simus / Parexocoetus brachypterus / Exocoetus volitans 等 ( トビウオ科の魚 )	hukiki / puhiki‘i	mālolo
14.Kyphosus fuscus ( イスズミ科の魚 )	pānohonoho nenuē	nenuē enenuē
15.Eleotridae / Gobiidae(ハゼ科の魚)	hinana	‘o‘opu
16.Decapterus sanctae-helenae( アジ科ムロアジ属の魚)	‘opelu kikā	‘opelu

17.Acanthurus xanthopterus (ニザダイ科クロハギ)	‘ōhua	pualu / puwalu / palapala
	makiko / māikoiko	
18.Echidna Neburos / Gymnothorax picta / Muraenophis pardalis 等 (ウツボやウナギの仲間)	au‘au kī / puakī / ‘ōilo	puhi
19.Apsilus zonatus / Etelis marshi / E. carbunculus(フエダイ科の魚)	ko‘i	‘ula‘ula
	‘ūkīkiki	
20.Neomyxus chaptalii (ボラ科の魚)	pua uouōa	uouōa
21.Mulloidichthys auriflamma / Upeneoides arge / Mulloidichthys samoensis / Upeneus arge (ヒメジ科の魚)	‘oama	weke ‘ula / w. pueo / w. ‘ā (a‘a) / w. pahulu

幼魚段階、中間段階、成魚段階の合計3段階からなるものは以下の9例である。

表2：幼魚段階、中間段階、成魚段階の合計3段階からなるもの

学名	幼魚	中間段階	成魚
1.Kuhlia taeniura (ユゴイ科の魚)	puahole / pua aholehole	‘apo‘apo	āholehole <sup>2</sup> / āhole / aholele
2.Katsuwonus pelamys (サバ科カツオ)	kīna‘u	‘āhua	aku
3.Selar crumenoph-thalmus(アジ科の魚)	pa‘ā‘ā	halalū / hahalalū	akule
	halalū / hahalalū	pa‘ā‘ā	
4.Euthynnus alleteratus(サバ科スマ属)	kīna‘u	‘āhua	kawakawa
5.Polydactylus sexfilis (ツバメコノシロ科ナンヨウアゴナシ)	moi-li‘i	palāmoi	moi
6.Albula vulpes (ソトイワシ科ソトイワシ)	pua ‘ō‘io	‘āmo‘omo‘o	‘ō‘io
7.Eleotris fusca (ハゼ科テンジクカワアナゴ)	hinana	‘ōkuhekuhe	‘ōkuhe / ‘akupa
		‘akupakupa	

8. <i>Scarus ahula</i> / <i>S. perspicillatus</i> / <i>S. rubroviolaceus</i> ( ブダイ科 キツネブダイ属の魚 )	‘ōhua	<i>pōnuhunuhu</i> / <i>pānuhunuhu</i> / male / ‘ōmamale / <i>palemo</i> <sup>3</sup>	uhu
9. <i>Caranx ignobilis</i> / <i>C. lugubris</i> / <i>C. elacate</i> / 等 ( ロウニンアジ、ポエイヒラアジ等 Carangidae アジ科に属する複数の魚 )	<i>papiopio</i> / <i>pāpio</i>	<i>pau u‘u</i> / <i>pā‘ū‘ū</i>	<i>ulua</i> ( <i>u. aukea</i> / <i>u. lāuli</i> / <i>u. ‘ele‘ele</i> 等 )
<i>Caranx sexfasciatus</i> ( ギンガメアジ )			<i>pake ulua</i> <sup>4</sup>
<i>Caranx melampygus</i> ( クロガメアジ )			‘ōmilu <sup>5</sup>

幼魚段階、中間段階二つ、成魚段階の合計 4 段階からなるものは以下の 5 例である。

表 3：幼魚段階、中間段階 2 段階、成魚段階の合計 4 段階からなるもの

学名	幼魚	中間段階 1	中間段階 2	成魚
1. <i>Mugil cephalus</i> ( ボラ科ボラ )	<i>pua ‘ama‘ama</i> / <i>pua</i> / <i>po‘olā</i> / ‘o‘olā	<i>kahaha</i>	‘ama‘ama	‘anae
2. <i>Chanos chanos</i> ( サバヒー科サバヒー )	<i>pua awa</i>	<i>awa ‘aua</i>	<i>awa</i>	<i>awa kalamoho</i>
3. <i>Pristipomoides sieboldii</i> / <i>P. microlepis</i> / <i>Aphareus Furcatus</i> / <i>A. rutilans</i> ( フェダイ科のヒメダイ、クロマツ、イシフェダイ、アカチビキ )	<i>akiki</i> ‘ūkīkiki	<i>pākale</i>	‘ōpakapaka	<i>kalekale</i>
4. <i>Upeneus porphyreus</i> ( ヒメジ科ヒメジ属の魚 )	<i>kolokolopao</i> / <i>kolokolopā</i> / <i>makokolopao</i>	‘āhuluhulu	<i>kūmū-a‘e</i>	<i>kūmū</i>
5. <i>Polydactylus sexfilis</i> ( ツバメコノシロ科ナンヨウアゴナシ )	<i>moi-li‘i</i>	<i>palāmoi</i>	<i>mana-moi</i>	<i>moi</i>

二つの中間段階及び成魚段階の区別の基準は基本的に大きさであると考えられる。Titcomb and Pukui (1952)では、項目 4(成魚 kūmū)以外の四つについて、大きさの目安を示している。例えば、項目 1 については、中間段階 1 の kahaha が手の長さくらい、中間段階 2 の‘ama‘ama が 8 インチ位、成魚段階の‘anae が 12 インチ以上となっている。

もう一つのパターンはわずか一例と特殊な例であるが、幼魚段階が 3 段階に細分されとおり、それに中間段階 1 段階、成魚段階の合計 5 段階からなるものである。

表 4：幼魚段階 3 段階、中間段階、成魚段階の合計 5 段階からなるもの

学名	幼魚段階 1	幼魚段階 2	幼魚段階 3	中間段階	成魚
1. Acanthurus triostegus (ニザダイ科 シマハギ)	‘ōhua-liko	‘ōhua-kani‘o	‘ōhua-pala-pohaku / ‘ōhua-ha‘eka‘eka	kakala-manini	manini

表 4 項目 1 の三つの幼魚段階については、孵化した直後からの極めて細かい成長段階の区別であるため、大きさだけでなく、色についても異なる特徴を持つとされている。Titcomb and Pukui (1952)によれば、孵化したばかりの幼魚段階 1 は切手サイズ程の小さくて透明な段階、幼魚段階 2 は生後一日程を経てこの魚の特徴である縞模様が見え始めてきた段階、幼魚段階 3 では海藻を摂取し始めて皮膚の色が濃くなり始める段階、とされている。

以上から、ハワイ語における魚の成長段階名の分類の仕方について以下のような特徴が指摘される。

- (1) シンプルな 2 段階が最も多く、段階数が増えて複雑になるほど例数が減る傾向が見られた。
- (2) 最も若い幼魚段階において、他の段階よりも別名が多く存在し多様性を示す傾向が見られた。
- (3) 同じ一つの名称が特定の魚の異なる成長段階を指す事例が複数見られた。
- (4) 異なる魚種で、成魚名は別の名称となっているにもかかわらず、幼魚名、或いは、中間段階名が区別されず異魚種間共通の名称となっているものが複数見られた。

(1)について詳しく述べると、最もシンプルな幼魚・成魚の 2 段階分類が 21 例、中間段階が加わった 3 段階分類が 9 例、中間段階 2 段階を含む 4 段階が 5 例、最も複雑な幼魚段階 3 段階・中間段階・成魚段階の 5 段階が 1 例と、段階数が増えるに従って例数が減少していた。

(2)の例としては、表 1 項目 8 で同じ魚種の幼魚名が計 10 存在するのを初めとして、同じく表 1 項目 6、9、12、13、14、17、18、19、表 2 項目 1、3、9、表 3 項目 1、3、4 のいずれも最も若い幼魚段階に別名が存在している。尚、3 段階分類においては、表 2 項目 3、7、8、9 のように、成魚段階の一つ前の中間段階で多様性が見られる事例が複数見られた。

(3)の例は二例見られた。表1項目14では、nenue という名称が、幼魚 pānohonoho・成魚 nenuue という系列で用いられる場合と、幼魚名 nenuue・成魚名 enenuue という系列で用いられる場合の二通りがあり、それぞれ、nenue という名称が、成魚段階と幼魚段階という異なる成長段階を示すことがあるとされている。もう一つ、表2項目3では、成魚名 akule に対する幼魚名と中間段階名に用いられる名称 pa‘ā‘ā と halalū / hahalalū の順番が入れ替わって用いられる場合がある、すなわち、pa‘ā‘ā (幼魚) < halalū / hahalalū (中間段階) < akule (成魚) として用いられる場合と、逆に halalū / hahalalū (幼魚) < pa‘ā‘ā (中間段階) < akule (成魚) として用いる場合があるとされている。

(4)については、大きく二つの分類に区分される。第一は、異なる魚種で成魚名も異なるにもかかわらず、幼魚名と中間段階名が共通というものである。表2項目2、4では、成魚名がそれぞれ aku, kawakawa と異なるのに対し、幼魚名・中間段階名が kīna‘u (幼魚) < ‘āhua (中間段階) と共通である。表2項目9 (成魚名 ulua, ‘ōmilu) も同様である<sup>6</sup>。aku と kawakawa はいずれもサバ科、ulua, ‘ōmilu はいずれもアジ科に属する近縁魚種同士であり、幼魚段階及び中間段階でのそれぞれの魚の特徴も類似している<sup>7</sup>。第二は、幼魚名のみ他の魚種と共通というものである。表1項目19 (成魚名 ‘ula‘ula) の幼魚名の一つに ‘ūkīkiki というものがあるがこれは表3項目3 (成魚名 kalekale) と共通である。‘ōhua (「家来、従属物」) という名称は、表1項目7 (成魚 hīnālea) 9 (成魚 kala) 10 (成魚 kupou 等) 12 (成魚 moano) 17 (成魚 pualu) 表2項目8 (成魚 uhu) で異なる魚種の共通の幼魚名として用いられている。また、‘āhua は前述の表2項目2、4で成魚名 aku, kawakawa の中間段階名として用いられているが、表1の項目12の成魚名 moano の幼魚段階名と共通の名称となっている<sup>8</sup>。このように、‘āhua と ‘ōhua は同様に、成魚段階より若い段階の魚の意味で用いられている。

## 2.2. 成長段階名称の形成法

成長段階名の形成法としては、以下の4通りの場合が見られた。

- (5) 他の成長段階と無関係の独立名称を用いる場合。
- (6) 成魚名の全体または一部の音節の重複されたものを用いる場合。
- (7) 成魚名又は最終中間段階名 (またはその部分) に別の要素が付加された複合的名称を用いる場合。

最も多く見られたのは(5)、すなわち、狭義の出世魚のように他の成長段階と無関係の独立名称を用いる場合が優勢であった。表2項目5及び表3項目5において成魚段階名 moi を、表3の項目2において、中間段階名2の awa を、それぞれ含む派生的複合的名称が他の全ての段階で用いられているという例外を除けば、他の全てについて、少なくとも、いずれかの成長段階で他の成長段階名とは無関係な独立した名称が使われていた。

(6)はハワイ語の興味深い特徴である。成魚名の全体または一部の音節の重複されたものより若い段階の名称になっているものがしばしば見られた。表1の項目1の幼魚名 ‘aha‘aha



は成魚名‘ahaの全体を重複した例であり、同じく表1項目3の幼魚名‘a‘ala‘ihiは成魚名‘ala‘ihiの最初の音節を‘aを重複したものである。表1項目9の幼魚名 pākalakalaのように一部の音節を重複した上で更に接頭辞が付されたものも含めて、合計6例であった<sup>9</sup>。

(7)は更に二つのグループに細分できる。第一は、<魚種名+成長段階>という構造を持つものである。ハワイ語の複合名詞では<名詞+修飾語>が基本的な構造であるため、<魚種名>を表す名詞の後ろに<成長段階>を表す修飾語が来る構造である。例えば、表2項目5では魚種を表す名詞 moi(成魚名)に成長段階を表す修飾語 li‘i(「小さい」)が結合した複合的名称 moi-li‘i(「小さい moi」の意味)が幼魚名として用いられている。その他の例として、表1項目16、表3項目4、表3項目2がある。

(7)の第二は、<成長段階+魚種名>という構造を持つものである。これは、<成長段階>を表す名詞に<魚種名>が修飾語として付加された構造として分析される。最も多い事例は、pua(「花、子孫、子供」)の後ろに魚種名を付加したものである。例えば、表1項目20の pua uouōaは pua(「子供」)に uouō(成魚名)が付加された複合的名称(「uouōaの子供」の意味)である。表2項目1、6、表3項目1、2も同様である。その他、<成長段階>を表す部分の意味は特定できないが、表2項目5 palāmoi、表3項目5の mana-moi、表4項目1の kakala-maniniもこの例に属すると考えられる。尚、表4項目1の3段階の幼魚名‘ōhua-liko等では、<成長段階>を表す‘ōhuaの後ろにそれを修飾する要素が結合されており、明示的に魚種名を表す要素が付加されていないという点で特殊である。‘ōhua-likoは<幼魚段階>を表す‘ōhuaの後ろに修飾要素 liko(「つぼみ」)が付加された複合的名称(「つぼみ的な幼魚段階」の意味)で manini(成魚)の最も小さい幼魚段階を表す名称であるが、魚種を明示的に示す要素は含まれていない。ここでは、(7)の特殊な事例として分類する。

### 3. 考察 日本語における魚の成長段階名との対照

#### 3.1. 澁澤による日本語諸方言における魚の成長段階名の諸様相との対照

澁澤(1992:249-253)が日本語の諸方言における魚の成長段階名について、以下のような側面があることを指摘している<sup>10</sup>。

- (8) 成長段階の数について、幼魚名と成魚名のみで合計2段階をもつもの、中1段階があり合計3段階もつもの、中数段階あり合計4段階以上持つもの、とが見られる。
- (9) 成長段階名の順序が地域により逆になるものが見られる。(例：スズキの成長段階名は通常デキ<セイゴ<フッコ<スズキ(東京での呼称)となるがフッコ<セイゴ<スズキの順になる場合がある。)
- (10) 成魚段階においては地域的多様性が見られないのに、幼魚名において地域的多様性を示しているものが見られる。(例：ウナギの幼魚名としてシラウオノバ、タチクラゲ等がある。)
- (11) 幼魚、若魚、壮魚の各段階名においては地域的に異なっていながら、最後の成魚段階名が地域をまたがって統一されているものが見られる。(例：ブリについて、成魚名ブリ

は全国的に共通だが、それまでの段階名が地域で異なっている。)

(12) 各成長段階があたかも別種のように呼ばれている場合と、各成長段階を通して通用する一般的な名称が存在する場合とが見られる。(例: プリの第二成長段階イナダをブリとは呼ばないが、マグロの幼魚シビはマグロと呼ぶこともできる。)

(13) 成長段階名が商品名或いは格付け名としての意味合いを持つ場合がみられる。

今回は、上記のうち、(8)から(11)に着目し、ハワイ語でも同じ様相が見られるかについて議論する<sup>11)</sup>。

(8)については、第2章の表1、表2、表3、表4で示されたように、日本語と同様、ハワイ語でも、幼魚名と成魚名のみで合計2段階をもつもの、中1段階があり合計3段階もつもの、中数段階あり合計4段階以上持つものが見られた<sup>12)</sup>。

(9)についても、第2章の(3)で示したように、表1項目14、表2項目3において、ハワイ語でも日本語同様、順序が入れ替わる場合が見られた。

(10)についても第2章の(2)で指摘したように、ハワイ語でも日本語同様、幼魚段階名称での多様性が顕著であった。

(11)であるが、ハワイ語で4段階の成長段階名を持つもの5例(表3)について、日本語のブリのように、若い3段階の名称までは異なる系列の名称が存在するが成魚名だけは統一名称が存在するという例は見られなかった。ハワイ語の中では対応する例は見つからなかったが、これについては、分析対象範囲を広げて、ハワイ語と近縁の別のポリネシア諸語間の対比まで拡大すれば該当する例が見つかる可能性があるかもしれない。今後の研究を待ちたい。

以上のように、(8)、(9)、(10)の3点が共通しているという点で、ハワイ語の魚の成長段階名システムは日本語諸方言のそれとおおむね合致していると言える。

### 3.2. 北海道方言における成長段階名称との対照

前節では、魚の成長段階名称に関連して、主に成長段階の区分の仕方について、日本語諸方言とハワイ語との対照を行った。北海道方言も日本語諸方言の一つであるため、ここでは、内容的に重複する部分については割愛し、前述の議論に含まれていなかった点で、北海道方言とハワイ語との間で見られた類似点を論じる。

尼岡他(2011)及び水島他(2003)によれば、北海道方言で「ジャミ」は「サンマ」の幼魚段階を指す名称であるが、石垣(1991)によれば、「イワシ」の幼魚名であるとされている。同じ「ジャミ」という名称が異なる魚種の幼魚段階名称として用いられていることになる。このように、成魚段階名称が異なるにもかかわらず、共通の幼魚段階名称が用いられている。この北海道方言の「ジャミ」は第2章の(4)の例で提示したハワイ語の‘ōhua と類似している。ハワイ語の‘ōhua も「ジャミ」同様、異なる魚種の幼魚名として用いられる。表5としてハワイ語の主な例と北海道方言の例を対照する。

表 5:ハワイ語と北海道方言における異魚種間共通の幼魚名の例

	幼魚	成魚
ハワイ語	‘ōhua	hīnālea(ペラ科の魚)
		kala (ニザダイ科の魚)
		uhu (ブダイ科の魚) 等
北海道方言	ジャミ	イワシ(ニシン科の魚)
		サンマ(サンマ科の魚)

また、「ジャミ」と魚種名を結合した複合的な名称の例として、尼岡他(2011)が成魚名「キンキン」の幼魚名として「ジャミキン」を挙げている。ハワイ語の‘ōhua も第 2 章の(7)で示したように、魚種名との結合ではないものの、他の要素と結合した複合的な名称として、manini (成魚名) に対応する幼魚段階名称として用いられている。

表 6:ハワイ語と北海道方言における‘ōhua・ジャミを用いた複合的幼魚名の例

	幼魚名	成魚名
ハワイ語	‘ōhua-liko / ‘ōhua-kani‘o / ‘ōhua-pala-pohaku 等	manini
北海道方言	ジャミキン	キンキン

このようなことから、ハワイ語の‘ōhua と北海道方言の「ジャミ」は「幼魚段階」を示す要素であること、単独で用いて複数の異なる魚種共通の幼魚名として用いられること、他の要素と結合して複合的に特定の魚種の幼魚段階名になること、という三点で特徴を共有している<sup>13</sup>。

上記は、幼魚名について異魚種間で共通の名称が存在するというものであったが、ハワイ語においては、第 2 章の(4)に示したように、これ以外に、異魚種間で幼魚名だけでなく中間段階名まで共通名称が存在する場合がある。これはハワイ語の特徴的な事と言える。

#### 4. 結び

ハワイ語における魚の成長段階名称について、区分の仕方と名称の形成法、及びそれらの特徴について示した上で、日本語及び北海道方言との対照を行った。ハワイ語における魚の成長段階名称と澁澤(1992)に示された日本語諸方言の魚の成長段階名の特徴との対照から、成長段階の区分数には幅があること(二段階、三段階、四段階以上)、幼魚名での多様性が顕著であること、個人差・方言差等により同じ名称が異なる成長段階で用いられることがあること、において、両者の間にある程度の普遍性を見出すことが出来た。

今回の分析により、幼魚段階名の特別な側面が浮かび上がった。日本語について澁澤(1992)が指摘しており、ハワイ語でも同様の結果が見られたが、まず、幼魚名において別称の多さが顕著であったということ、その一方で、ハワイ語や北海道方言の例で示したように、異な

る魚種で成魚名も違っているにも関わらず、共通の幼魚名称がしばしば存在するという示された。このように、幼魚段階名称について、方言間・個人間での多様性と魚種間での画一性を併せ持つという側面が示された。

また、ハワイ語ならではの特征としては、単語全体又は一部の音節の重複により幼魚名を形成する点、異なる魚種間で成魚名も異なるのに幼魚名だけではなく中間段階名まで共通名称が存在する点があるという点が示された。

今後の課題としては、二つのことを予定している。一つは、ハワイ語において、どのような魚種に成長段階別の名称が付与される傾向があるのか、成長段階別名称が生じる背景について、検討することである。今回集めたデータには、ハワイでおいしい魚とされているものが多く含まれていた他、伝統や儀式で重要な役割を持つとされる魚等、社会的関心が高いと思われるものが多く見られた。今後、伝統文化関連の文献も参照しながら分析を進めていきたい。もう一つは、ハワイ語と他の同系のポリネシア諸語の対照を通して、どのような魚種の成長段階名がポリネシア諸語分岐の歴史の中で継承されてきたのか、また、どのような成長段階名が、新しく個々の言語で独自に発達してきたのか考察することである。これについては、今後共同研究として計画されている北海道方言と隣接する東北諸方言との対照研究データも参照して、魚の成長段階名の地域的広がりに見られる普遍的な傾向の考察へとつなげていきたい。

## 謝辞

\* 本研究は科学研究費補助金・基盤研究(C)「渡島半島東岸部と西岸部における伝統的な漁業関連方言語彙の比較調査」(課題番号:26370523 研究代表者:橋本邦彦)の一環である。二名の査読者から貴重なコメントを頂いた、この場を借りて謝意を表したい。

## 注

- <sup>1</sup> 成長段階名称の順番が入れ替わっている例のうち、後述の表1項目14は方言差であること明示されている、一方、表2項目3はインフォーマント間の不一致とされているが、インフォーマントが異なる方言地域の出身であるのか、同じ方言地域の出身であるのか明示されておらず、方言差である可能性も否定できない。実際、今回収集できたデータの大部分は、別称として複数の名前が列挙されているだけで、変種の存在が方言によるものか個人によるものか明示されていない。そうした事情から、本来であれば方言差であるのか個人差であるのか区別を明示すべきところであるが、本稿では敢えて個人差によるものも地域差によるものも別称ということで一くくりにして提示する。
- <sup>2</sup> Pukui and Elbert (1982)には āholehole が若魚名で āhole が成魚名という記述がある。Titcomb and Pukui (1952)では āhole は成魚 āholehole の別名の一つとして挙げられている。
- <sup>3</sup> Titcomb and Pukui (1952)では uhu の一種である uhu ula の若魚段階としているが、Pukui and Elbert (1982)では uhu の若魚段階としている。
- <sup>4</sup> pake ulua という名称は Randall(2010)、Hoover(2008)にハワイ語名として示されており、幼魚名として pāpio を挙げている。Titcomb and Pukui (1952)には ulua の一種として学名 *Caranx sexfasciatus* が含まれているが

ハワイ語名は示されていない。

- <sup>5</sup> ‘ōmilu は、Titcomb and Pukui (1952)では ulua の一種として学名は *Caranx melampygus*、*C. ferdau*、*C. gymnostethoides*、*C. ajax* 等複数の可能性を挙げている。より新しいデータである Randall(2010)、Hoover(2008)では学名 *Caranx melampygus* となっているのでそれに従った。
- <sup>6</sup> ‘ōmilu の幼魚段階名と中間段階名については Titcomb and Pukui (1952)は明確には示していないが、ulua 類については共通に幼魚名 *pāpiopio* / *pāpio*、中間段階名は *pau u‘u* / *pā‘ū‘ū* であるとしているので、これらの幼魚名と中間段階名は‘ōmilu にも当てはまると思われる。尚、幼魚名 *pāpio* については、Hoover (2008) が‘ōmilu の幼魚名であると明示している。
- <sup>7</sup> Titcomb (1952:87)は成魚段階になるまで *aku* と *kawakawa* は見分けが付き難いと述べている。
- <sup>8</sup> Titcomb(1952:51)は幼魚段階では多くの魚が外見上似ているため同一の名称が用いられたと述べている。
- <sup>9</sup> Elbert and Pukui(1979:67)はハワイ語において音節の重複は指小の意味を表すことがあるとして、幼魚名の例をあげている。
- <sup>10</sup> 澁澤(1992)も、狭義の「出世魚」だけではなく同じ語から派生した下位分類的名称が付与されている場合も含めて論じている。
- <sup>11</sup> (12)と(13)については、今回は議論の対象から除外する。更なるデータの収集を待ちたい。
- <sup>12</sup> 澁澤(1992)が、合計4段階以上を持つ魚種として、東北から沖縄までを含む広大な地域から、マイワシ、マス、ニシン、カタクチ、ボラ、トビウオ、カツオ、マグロ、メナダ、ブリ、サワラ、マダイ、スズキ、カンパチの14(4年、5年など年数がつくアオギスは除外した)をあげているのに対し、ハワイ語では表3と表4に示された合計6となっている。ハワイ諸島最大の島ハワイ島でさえ四国の半分程度の大きさでしかないハワイ諸島と、東北から沖縄までの広大な地域という規模の違いを考えると、ハワイの6という数はかなり多い数と考えられる。
- <sup>13</sup> ハワイ語の‘ōhua は小さな型の魚に関連する共通の魚名構成要素であるが、大きな型の魚に関連する共通の魚名構成要素のようなものはハワイ語には見当たらなかった。

## 参考文献

- Elbert, Samuel H. and Mary K. Pukui. (1979). *Hawaiian grammar*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Hoover, John P. (2008) *Hawaiian reef fishes*. Honolulu: Mutual Publishing.
- Pukui, Mary K. and Sameual H. Elbert. (1986). *Hawaiian Dictionary*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Randall, John E. (2010) *Shore fishes of Hawaii*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Titcomb, Margaret and Mary K. Pukui. (1952) *Native Use of Fish in Hawaii*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- 尼岡邦夫、仲谷一宏、矢部衛. (2011) 『北海道の全魚類図鑑』. 札幌: 北海道新聞社.
- 石垣福雄. (1991) 『北海道方言辞典』. 札幌: 北海道新聞社.
- 木村盛武. (1997) 『北の魚博物誌』. 札幌: 北海道新聞社.
- 澁澤敬三. (1992) 「日本魚名の研究」. 『澁澤敬三著作集』第2巻. 9-391. 東京: 平凡社.
- 日本魚類学会. (1981) 『日本産魚名大辞典』. 東京: 三省堂.
- 水島敏博、島澤雅(監修). (2003) 『新北のさかなたち』. 札幌: 北海道新聞社.

北海道言語文化研究  
No. 15, 95-107, 2017.

北海道言語研究会

執筆者紹介

氏名：塩谷亨

所属：室蘭工業大学ひと文化系領域

Email：shionoya@mmm.muroran-it.ac.jp

